

心の托鉢

第二話・人間への関心

早坂浩八

「自然界のことは、知れば知るほど未知の領域が広がる」と言っているのは、アイザック・ニュートンです。

知るという働きから見れば、自然を対象にした分野の方が格段の進歩があり、こと人間を知るといふ分野に関しては進歩してきたという証明すらむずかしいと言われており、ここに人間の持つ特性の複雑さが浮きぼりにされています。

それでは、人間について“知りたい”という願いを諦めなければならないかと言えば、私にはそうは思えないのです。

「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」

この場合、何について知ることかといえば、やはり自分自身を含めた人間というものについてでありましょう。

百人の哲学者がいれば、百通りの哲学があるとされるように、人はそれぞれの人間観を持っています。

そして、それは人生の飾りものではなくて、日常的な実生活の中で、その人の具体

的な生き方を決めるものであると思っています。

人間の特性についてのアプローチの仕方にはさまざまな角度方法があるようですが、平凡な常識的発想で、二つの面から接近を試みたいと思います。

(1) 学ぶことについて。

人間は、ほかの動物と違って抜群の学習能力を持っています。

それは、生れてすぐの本能的な行動パターンから抜け出す過程だけでなく、成長して自我の意識に目覚め、社会人としてある役割を果たすところまで、さらに生きている限り続いていくのです。

学習行動のなかでも、文化の分野について学ぶとか、人格を育てるといふようなことは、ネズミやハトの実験結果からは類推することが不可能であることが知られています。

一般には、「学ぶ」といえば「勉強」そして「勉強」なら「学校」という結びつ

きの意識がありますが、「学ぶ」ということは、本来は人間の本性に深く根ざしたものであるとされています。

知らなかったことを知るようになり、出来なかったことが出来るようになることに大きな喜びを感じるのです。

到達された結果からだけではなく、そこに至るプロセスにおいても、満足と感動が味わえるように出来ているのが人間であると考えられます。

「自己啓発」という言葉のもつ意味は、社会生活の中で、おとなになると誰もいちいち治療に手を貸してはくれないし、利き目の良い薬の処方箋も簡単に出来ていないから、自分で治すしかないということかも知れません。

しかし、それは決して難しいことではなく、趣味的なことやスポーツ、何かの技能の習得などでは誰でも、比較的容易に体験しているところでありましょう。

(2) 人間の弱さについて。

高度に発達した精巧な機械は、取り扱いに細心の配慮を怠ると、とかく故障を起こしやすいものであります。

辞書で、Delicate〈デリケート〉には、優美な、せんさいな、敏感な——という意味と、こわれやすい、取り扱いの難いという語義が並んで示されています。

人間の持つ特性は、いずれの他の動物に比べて格段にすぐれているように見えます。

たしかにそうではありますが、諸刃の剣であって、その分だけ受ける傷も深いのではないのでしょうか。

人間は豊かな想像力に支えられて、複雑な思考と感情を抱くことができます。

人間社会の中にある、一見非合理にみえる社会慣習や自然発生的な（生活の智慧とも言える）制度が、実は人間の弱さをカバーするはたらきをしていることが多いようです。

家族や結婚の型態、あるいは日本的と言われる義理人情などは、人間がそれほど立派でもないし、強い生きものでもないことを示しているのではないかと思います。

このことをお互いによく認め合っていることが人間として生きていける支えになっているのではないのでしょうか……お互いに助け合いながら。

「自己啓発」——自分は何ものであるかを考えながら自分自身を見つめる日々の中で、人間として人間への関心を持ちつづけて行きたいと考えているのです。

第二話 おわり
(協会事務局長)